

# 中度の精神遅滞を伴った自閉症児における 漢字熟語の読み学習

長谷川芳典<sup>1</sup>

**要 旨** 中度の精神遅滞を伴い、自閉的傾向をもった児童が、9歳から、初めて全語法による漢字単熟語の読みの学習を開始した。1年間の訓練により、習得した単熟語は252語に達した。またそれらを構成する漢字は289種類にのぼった。学習開始の4ヶ月目より、単熟語の弁別速度に関して、パソコンを用いた実験的検討を行った。電子音声発声装置が発声した語句を5個の選択肢から選ぶという課題において、短い反応潜時（4sec未満）で答えた語の中では、漢字まじりで書かれた語のほうが平仮名のみで書かれた語よりも有意に多かった。障害児における文字教育においても、「まずは平仮名の読み書きから」といった固定観念を捨て、漢字の早期導入を検討する必要がある。

長大医短紀要4:67-71, 1990

**Key words** : 漢字, 全語法, 自閉症, 精神遅滞

中度の精神遅滞をとめない自閉的傾向のある発達障害児1名に対して、1年間にわたり漢字単熟語の読み学習訓練を実施した。本稿はその学習内容を分析することにより、障害児における文字教育のありかたについて考察することを目的とする。

本児は、長崎市内の養護学校に在籍しており、訓練開始の時点で9歳であった。訓練開始にいたるまで、養護学校・家庭内とも、漢字の読みに関して特別の教育を受けたことはなかった。

母親および、8歳前後から感覚統合訓練の指導を担当していた作業療法士によって、本

児の特徴として次の点が指摘されている。①言語理解は、日常会話程度は可能である。②本児自ら話しかけてくることはあまりないが、要求が単語又は二語文で行う。③特定の場所や物に対し、“こだわり”があり、儀式的な行為が見られる。その行為を止めようとする、怒ったり泣いたりして興奮気味になる。④本児は不得意なことをさせようとした場合にも、怒ったり泣いたりして興奮気味になる。⑤ふだんは、大人に対し従順で素直である。⑥発音や筆記のさいに、「は」と「あ」、「し」と「ち」、「す」と「つ」、「ら」と「だ」、「ひ」と「い」、「ふ」と「う」等を混同したり、

1. 長崎大学医療技術短期大学部一般教育

「ん」・促音・拗音に関してミスをする  
ことがある。

訓練開始からほぼ1年後の9歳11ヶ月時  
点で行った発達検査によれば、①絵画語彙  
検査(PVT)：語彙年齢4歳6ヶ月、②コ  
ース立方体テスト：IQ 89, WISC-R：  
言語性検査は粗点0が多く検査になじまず、  
動作性検査はIQ 44~51という測定結果が  
出ている(測定はすべて、長崎大学医療技術  
短期大学部作業療法学科伊藤斉子助手による)。

漢字熟語の読み学習訓練は、被験児の家庭  
内で母親の指導のもとに次の手順で行われ、  
原則として、毎週、長崎大学医療技術短期  
大学部において習得状況のチェックを行った。

①図書館カード大のカードにマジックペン  
で被験児の知っている単熟語を縦書きで記入  
したものを用意する。②これらを1枚ずつ提  
示し、読みを発音させる。正しく発音できた  
時は賞賛し、できなかった時は母親が正しい  
発音をした上で、被験児に反復させる。③カ  
ードは同一セッション内でも何回か提示し、3

連続正答になるまで提示を続ける。④3セ  
ッション連続して正答となった場合に、学習達  
成とみなす。⑤訓練の際には、未学習のカー  
ドに学習済みのカードを適度に配合し、全体  
の正答率が6割以上になるよう工夫する。

以上に述べた訓練を1年間にわたり実施し  
た結果、読みを習得した単熟語は合計252語  
に達した。図1に、習得語の累積数の変化を  
示す。また、それらの語を構成する漢字は  
289語種類にのぼった(表1参照)。なお、  
図1の増加曲線には、ところどころ停滞が見  
られるが、それらは、その時々家庭の事情  
によるものであり、決して、学習上の困難を  
示すものではない。つまり、学校から与えら  
れる宿題等で時間を奪われたり、母親が多忙  
であった等の外部の起因する停滞である点を  
指摘しておく。

次に、漢字まじりで表記された単熟語と平  
仮名のみで表記された単熟語のどちらが早く  
弁別できるか、実験的検討を行った。実験は、  
長崎大学医療技術短期大学部において、「読

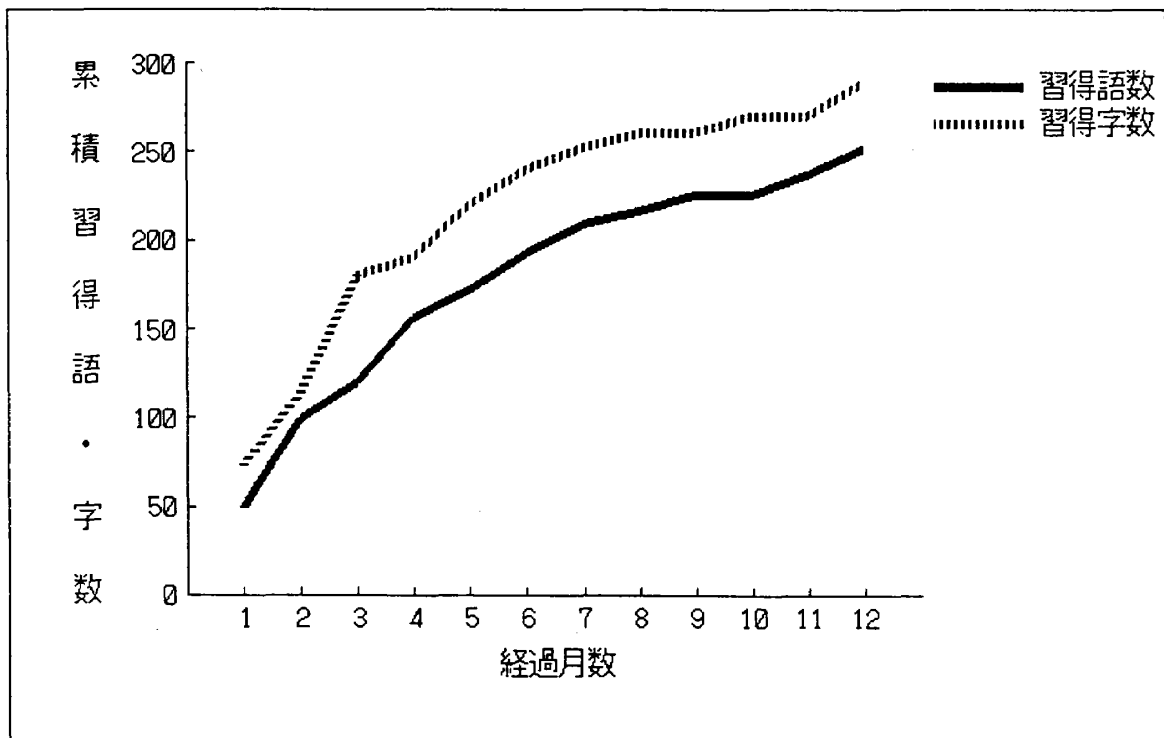


図1 実線は読みを習得した単熟語を、破線は、それらの語を構成する漢字の種類を示す。

表1 読みを取得した単熟語を構成する 289 種類の漢字一覧

挨暗椅医育一稲引飲院運永泳園遠鉛黄屋下化夏架歌火花  
 荷課画会海絵階学割滑汗間関館丸器机機気汽記儀吉休急  
 球給牛魚強教局玉巾金銀具空靴計月権犬見玄現庫語公口  
 工校港紅絞綱行号合国黒根砂祭財坂阪咲崎作拶雜皿三傘  
 山散算刺司子市紙資齒事字時耳自式室写社車手寿住十宿  
 出所書除小松焼上乘場色食信新真神身諷水数制正生西青  
 石積赤切雪先川戦扇洗線船噌組掃操窓蔵足族体替袋台大  
 題宅濯達脱短団段地茶着中帳朝跳長停庭程天田電塗土当  
 筒豆頭動堂道德読日乳入熱年粘買白迫麦箸八髪番飛菱筆  
 百表描病浜布腐部風服福払物粉文聞並米便勉弁保歩母報  
 訪帽本磨満味民明面毛木目餅野役葉友由祐遊予与用絡卵  
 理立旅料療緑冷連呂路廊話碗莓

み」訓練開始の4ヶ月目より12ヶ月目までの間、1～3週を隔てて合計25セッション行われた。

実験では、電子音声発声装置（マイクロクス社：音次郎二代目）が発声した単熟語を、パソコン（NEC社：PC9801VM2）のディスプレイ（NEC社：PCTV472）上に表示された5個の単熟語の中から番号で選ぶという課題が与えられた。5個の単熟語は、すべて漢字まじりで表記されているか、平仮名のみで表記されているか、いずれかであり、番号を選ぶまでの反応潜時が測定された。なお、使用された単熟語は、被験児がすでに読みを習得した語のうちの250語からランダムに選ばれたものであった。

漢字まじりの表記、平仮名のみ表記とも各セッション10語ずつ、25セッションで250語が発声されが、このうち該当する語を正しく選択できた数は、漢字まじり表記が233語、平仮名のみ表記が238語であった。

図2に、選択に要した反応潜時の分布を、表記別に示す。ただし誤答は別途集計した。反応潜時の中央値は、漢字まじり表記が6.03

sec、平仮名のみ表記の場合が6.38secであった。この差は有意水準に達していない。(CR=1.56,  $p < .12$ )。しかし、図2を見ると、潜時が4sec未満では、漢字まじり表記の語数が多くなっている。じっさい、該当する語数は、漢字まじり表記49語に対して、平仮名のみ表記28語であり、漢字まじり表記の語数のほうが有意に多かった。(CR=2.39,  $p < .02$ )。短時間内に弁別できる語としては、漢字まじりで表記された語のほうが多いと結論することができる。

以上の結果は、中度の精神遅滞をともない自閉症傾向のある発達障害児においても、漢字まじりで表記された単熟語の読み学習がじゅうぶんに可能であることを示しており、障害児に対する現行の文字教育に対して重大な疑問を投げかけるものである。

文字を数えるさい、「まず平仮名の読み書きを教え、それを完全に習得してから少しずつ漢字の読み書きを教える」のがよいのか、それとも「平仮名・片仮名・漢字の区別にこだわらず、大人がふつうに使っている通りの表記法で、熟語の読みから教える（書取学習

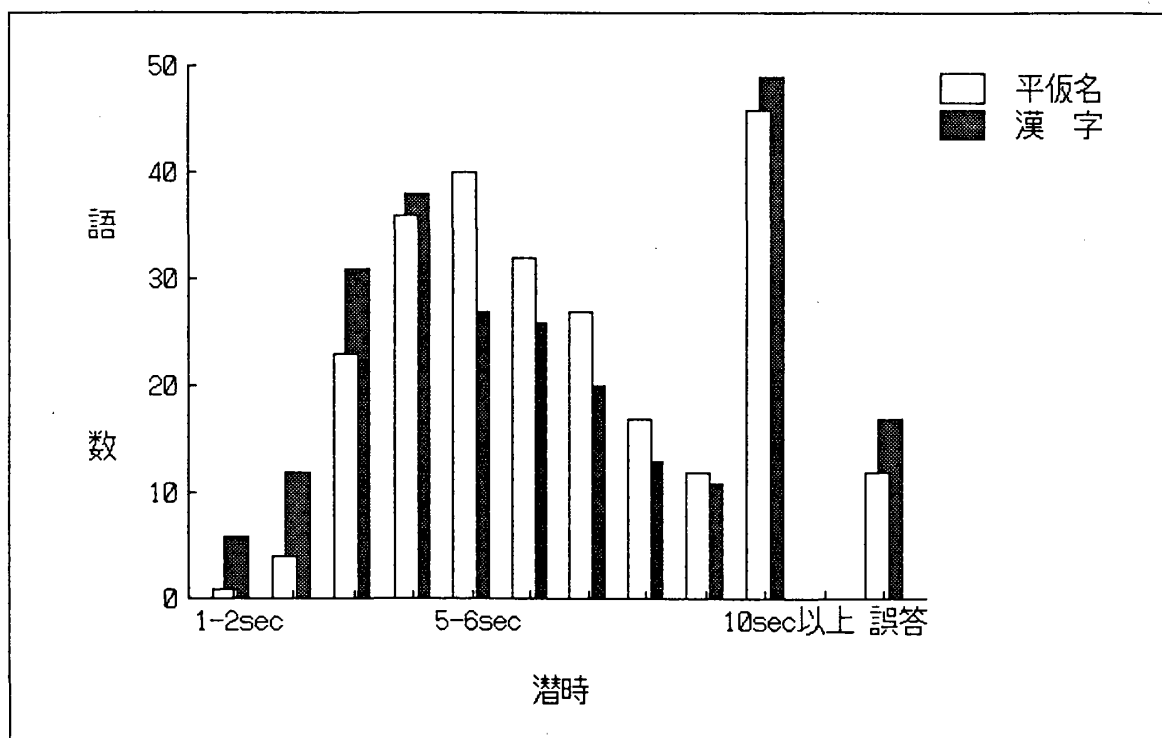


図2 電子音声発声装置が発声した語を5個の選択肢から選ぶまでの反応潜時の分布を、選択肢が漢字まじりで表記されていた場合と平仮名のみで表記されていた場合に分けて表示してある。なお、横軸の目盛りはn sec 以上 (n + 1) sec 未満を表す。

は必ずしも並行させない) のがよいのか、これは学習心理学的には未だ決着のついていない問題である。しかし、現実には、「平仮名はやさしく漢字は難しい」との固定観念が何の科学的根拠もなしに信じ込まれ、「まず平仮名の読み書きから」という文字教育が一方的に実施されているケースが多い。

本児の通学している養護学校においても、この固定観念は払拭されていないようである。母親の報告によれば、2年生の時からようやく平仮名の読み書きが教えられ、4年生の現在ではカタカナの読み書きを指導中とのことであった。いっぽう、漢字については、画数の少ない字から家庭内で徐々に学習をすすめてほしい、と言われたそうである。このような教育方針の背景には、「平仮名のほうが漢字よりやさしい」、「画数の少ない漢字ほど覚えやすい」との固定観念が根強く横たわっているように思う。

読みだけに限るならば、漢字単熟語の学習

は、健常児では2歳すぎからじゅうぶんに可能であり、([1], [2], [3], [4], [5]), 漢字導入の足を引っ張っているのは、もっぱら書取上の困難からである。しかし、読みだけでも早期に学習しておけば、好きな本はもちろん、注意書・説明書・案内表示など日常生活に必要な文書や掲示等を読むことができる。「読み」「書き」一体にこだわって漢字の導入を先延ばしすることは、幼児期のすぐれた読み能力の芽をつぶすことにもなりかねない。

なお、近年では、鉛筆を持って手で字を書かなくても、ワープロソフトを起動し、種々の入力装置を利用することで自由に漢字まじりの文章を作成することができるようになってきた。手先が不自由な障害者むけの入力システムも開発されている。([6], [7])。このように科学技術が発達した現代では、手書きの訓練にこだわることなく、障害の程度に見合った入力システムを利用し、「書取」の

面においても、より早い段階から漢字を導入する試みを進めていく必要があると思う。

最後に、石井〔3〕は、漢字を覚えることが脳障害児の精神の安定化につながったとの体験談を紹介している。このように、漢字の学習は障害児の他の側面の改善にも役立つ可能性がある。生活上の必要から漢字の導入を検討するばかりでなく、障害児の全体的な発達への漢字学習の効果についても今後さらに実証的な検討を積み重ねていく必要があると思う。

#### 謝 辞

本研究の遂行にあたって御支援をいただいた長崎大学医療技術短期大学部作業療法学科の土田玲子助教授、伊藤斉子助手、及び、諫早療育センター作業療法士の川崎弘美氏に深く感謝いたします。

#### 文 献

1. 長谷川芳典：2歳児における漢字の読みの学習過程。長崎大学医療技術短期大学部紀要 1989; 2:139-150.
2. 長谷川芳典：3歳児における漢字熟語の読みと生成。行動分析学研究 1989; 4:1-18.
3. 石井勲：石井式漢字教育革命。グリーンアロー出版社。東京、1987.
4. スタインバーグ DD, 田中美穂：2歳から童話が読める。ごま書房。東京、1989.
5. 山田稔：幼児は漢字が大好きだ。登龍館。大阪、1981.
6. 畠山卓朗, 川上博久, 相良二朗, 奥英久, 中川利光, 松田暁洋：重度肢体障害者用キーボード・マウス・エミュレータの開発。ヒューマンインタフェースシンポジウム論文集 1986; 2:237-242.
7. 畠山卓朗, 田中理, 飯島浩, 松野史幸, 中川利光, 萩原孝一：重度肢体障害者のためのパソコン操作環境の改善——操作作用インタフェース, ファイル操作を中心に。ヒューマンインタフェースシンポジウム論文集 1989; 5:231-236.

(1990年12月27日受理)